

周辺からの記憶 44

2022年6月 福島フィールドワーク

村本邦子(立命館大学)

この夏はプエルトリコに行ってきた。プエルトリコは、カリブ海の北東部に浮かぶ島である。先住民タイノが暮らしていたが、コロンブスに「発見」され、スペインの植民地になった。それから、先住民やアフリカから「輸入」された黒人奴隷を使って金採掘が行われ、金が掘り尽くされると農業植民地となり、貧しいスペイン人たちが農業移民としてやってきた。1898年の米西戦争の結果、アメリカに割譲され、現在までアメリカの未編入領土である。住民はアメリカ国籍を持つが連邦所得税は免除され、大統領の選出権はない。

その結果、アメリカ企業が進出し、タックスヘブンとして本土の富裕層が集まり、住民の多くが貧困で、「現代の植民地」とも言われている。貧困や暴力の問題に加え、2017年のハリケーンマリアなど大災害の影響もあり、DV、虐待、自殺などメンタルヘルスの状況が悪いことが指摘されている。現在のプエルトリコはリゾート開発され、ローカルな人々は住むところを追われ、ビーチへのアクセス権も奪われた。自分の意志とは無関係土地を追われる人々が世界中にたくさんいる。

それでも、プエルトリコは音楽や踊り、美術など文化の水準が高い。町中のあちこちにあるグラフィティには眼を見張った。しかも、自分たちのルーツやアイデンティティを主張するメッセージ性の高いものが多い。ふと双葉駅周辺の絵を思い出した。「フタバ・アート・ディストリクト」というプロジェクトによるものだ。アートで双葉を活気づけようという取り組みらしいが、いつもここに来ると複雑な思いに襲われる。地元の人たちはどう思っているのだろう。



6月24日(金)

仙台空港の展示

今年はプロジェクトに先立ち、新しい体制での「プロジェクト+」の事前調査を兼ねて、6月24日から26日、個人的な福島フィールドワークを実施した。

いつもは新幹線を使うため、仙台空港に来る機会はあまりなかったが、今回、空港ターミナルビルの一角に震災関連展示を見つけた。2021年2月に、仙台空港は、震災伝承ネットワーク協議会より「震災伝承施設」として登録されたようだ。

2011年3月11日、仙台空港も津波によって甚大な被害を受けた。ライフラインは寸断され、浸水で孤立した空港には、空港を利用していた客や避難してきた地域の人、空港や関連施設のスタッフなど約1,700人が取り残され、全員が退避するまでに6日を要した。自衛隊や米軍の復旧作業により、震災発生から約1か月後の4月13日に国内線の一部が再開、同年9月に国際定期便が復活し、復興への一步を踏み出した。当時、あまりに早い復旧に驚いた記憶がある。

そこには、高さ3.02mの津波到達点を示す津波高表示と、震災当時の様子を時系列で説明した震災説明パネルが常設展示されていた。空港内各所には、津波警報等発表時の避難経路を知らせする津波避難サインも設置されていた。



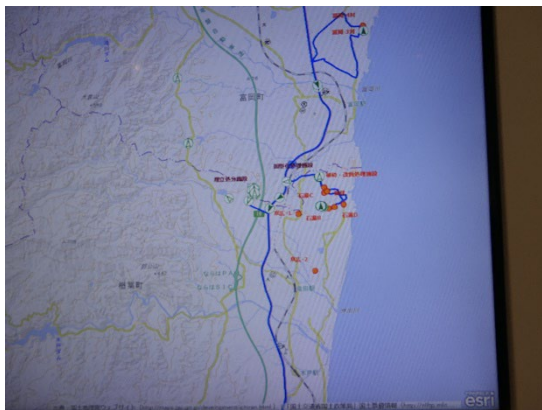


特定廃棄物埋立情報館「リプルンふくしま」

一度、特定廃棄物埋立施設の見学をしたと思っていたのだが、事前に見学者の個人情報を詳しく求められ、多少緊張した。初めに、情報館「リプルンふくしま」の館内を簡単に案内され、説明があった。

説明は、除去土壌や廃棄物などの発生経緯と処理の流れ、運び出しから埋立てまでの流れ、安全対策、放射線の基礎知識、地域の復興に向けた取り組みから成っていた。







第二保管施設 破砕・改質処理施設

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/cement_solidification_plant/about.html



粒度調整・異物除去設備

<https://www.konoike.co.jp/news/archive/2019/201904012121.html>



混練物を養生するための養生ラック

<https://www.konoike.co.jp/news/archive/2019/201904012121.html>

廊下からガラス越しに中を覗くことができたが、あちこちに「管理区域」と書かれた放射能区域を表すマークのついたサインがあった。建物内の作業はほとんどロボット

がやっており、人は防護服を身に付けていた。こうして毎日、危険と隣り合わせで働いてくれている人たちがいることを改めて認識した。



埋立作業図

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/landfill_disposal/



特定廃棄物埋立処分施設

https://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/reprun/related_facilities/umetate/

案内してくれた若い女性によれば、周囲の空気線量も年々減ってきているということだったが、科学の最先端と言っても、要するに穴を掘って埋めるという原始的な方法しかないんだと溜息が出た。

東日本大震災・原子力災害伝承館

それから双葉へ車を走らせた。



伝承館に入るなり、スタッフが、「この前の裁判の結果も地元の者にも納得いかない」などと熱く語る。これまでの経験と比べ、やや意外な感じがしたが、そういう人をむしろ置くようになったのだろうか。

裁判とは、6月17日、福島、群馬、千葉。愛媛で提訴された4県の集団訴訟で、「津波対策が講じられていても事故が発生した可能性が相当ある」として国の賠償責任はないとする統一判断を示したことを指している。裁判官4人のうち3人の多数意見で、検察官出身の三浦守裁判官だけが国の責任を認める反対意見を出したと報じられた。4県の原告総数は3700人、二審判決は群馬以

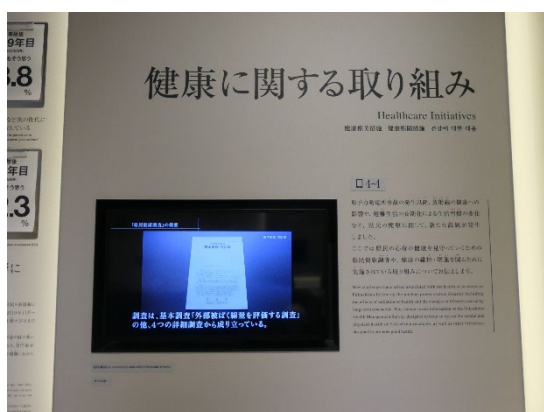
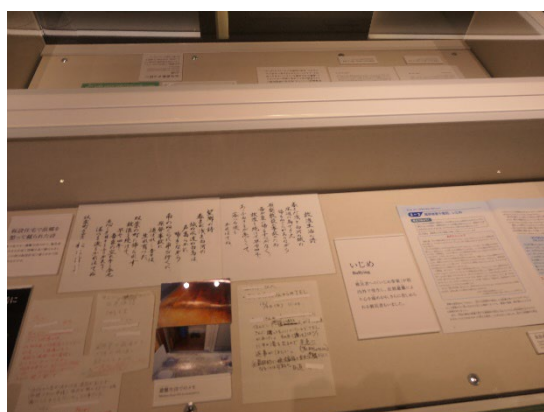
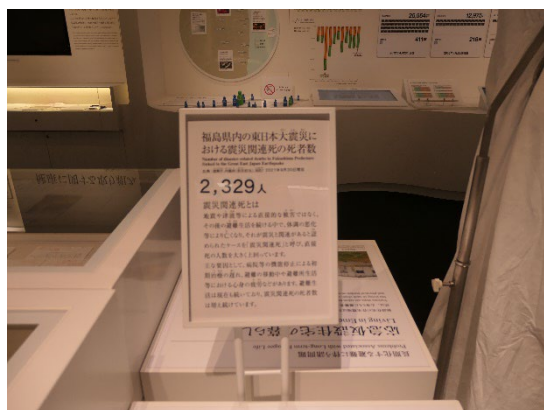
外の3県で国の責任を認めていた。最高裁判決以後、各地の地裁と交際の判決はいずれも国の責任を否定した（東京新聞、2024年6月14日 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/333374#:~:text=%E6%9C%80%E9%AB%98%E8%A3%81%E3%81%AF2022%E5%B9%B4%E6%9C%8817%E6%97%A5%E3%80%81%E7%A6%8F%E5%B3%B6,%E5%8F%8D%E5%AF%BE%E6%84%8F%E8%A6%8B%E3%82%92%E5%87%BA%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82>）。

まず、展示室に入る前に、プロローグ（導入シアター）で7面の大型スクリーンで見ることになっている。福島県出身の西田敏行のナレーションで、原発の建設から地震、津波、原発事故の発生と住民避難、復興や廃炉について、映像やアニメーションを交えて説明される。どうしても原発導入したことの正当化のように聞こえてしまう。

それから関連年表、事故前の町の状況、子どもたちの日記や作文だとか、コンクールのポスターなどの掲示があり、町の人たちが希望を持って原発を受け入れていたような文脈が見せられる。



それから、災害の始まり、事故直後の対応、県民の思い、長期化する原子力災害の影響、復興への挑戦の順に展示ブースが並ぶ。批判を受けて、最初はなかった関連死者数2,329人の数字が展示されていた。



「健康に対する取り組み」というコーナーがあったが、心身の健康と銘打ってあるにも関わらず、内容を見ていくと、放射能の身体的影響については触れられず、心の問題にすり替えられているような印象を受ける。双葉から浪江にかけ大きな福島県復興祈念公園国営追悼・祈念施設ができることになったが、少しずつ道路が整備されていた。



6月25日(土)

あじさい寺

番外編ではあるが、特定廃棄物埋立施設を案内してくれた女性が、いわきのあじさい寺(臨済宗妙心寺派波立寺)を教えてくれたので、朝、立ち寄ってみる。

806年、徳一大師が海上鎮護を念じ、海上から出現したと言われている薬師如来(波立薬師)を安置して創建したと言われている。道路を挟んだ目の前に、海から突き出た弁天島と、朱塗りの橋がシンボルの波立海岸があり、玉砂利の珍しい海岸だった。

たしかに色とりどりのあじさいが咲き乱れ、あじさい寺と呼ばれるにふさわしいお寺だった。タイミングもよかったのだろう。



野馬土ツアー

この日は、南相馬市にある NPO 法人野馬土の被災地ツアーに申し込んでいた。野馬土は被害を受けた農家を中心に、2012 年 10 月に設立され、米・野菜の放射能測定、再生可能エネルギー、被災地ツアーなどを行っている。「野馬土」には、「野馬追の相馬の大地、ノマドは荒野を駈ける遊牧の民、野窓は世界に開かれたウィンドー」が重ねられているとのこと、農業が盛んでありながら原発大国でもあるフランスの財団に寄せられた市民の義援金が発端となってスタートしたそうである。カフェにはまちの人が集まり、直売所には、地元の新鮮な農産物の他、全国に広がる農業のネットワークを介した日本各地から旬の特産品が並ぶ。

ここで発行されている「被災地フクシマの旅」実行委員会による『しんぶん福島からの発信』の第 10 号（2019 年 3 月）から第 14 号（2022 年 3 月）までを頂いたが、希望の牧場の吉沢正巳さんや生業訴訟団長の記事、中間貯蔵庫やヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館、東日本大震災・原子力災害伝承館の見学レポートなどとても充実した内容となっていた。

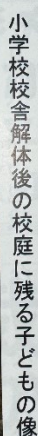
とくに伝承館の展示に関する批判もはっきりしており、①原発メルトダウンがなぜ起きたのかの原因説明がされていない ②建設当初から盛んにふりまかれた「原発安全神話」の反省がまるでない ③福島県民の大きな被害の分析が不十分 ④こうしたことがないままロボット開発、空飛ぶクルマ研究などの施設を作るのが復興計画の目玉という展示 が指摘されていた（2021 年 3 月）。次の号（2021 年 9 月）には、「批判

受け、一部展示変更」の記事があり、「安全神話の崩壊」のパネル展示が新たに加わったことが書かれていた。政府が人災と認めたことによりこの展示が追加されたそうである。これが、唯一、この伝承館で評価できる点かもしれないと書かれていた。私自身も開館直後と翌年に訪れ、変更点を確認していたが、細かい所まで気づいていないことが多かった。とくに直後は写真撮影 NG だったため、詳細の記憶がない。この記事によれば、「原子力の利用」という習字の作品が追加された。

私自身は、きのう展示を見て、町の人たちが希望を持って原発を受け入れていたような文脈が見せられているように感じたが、つまり、町の人々に責任転嫁しているようなニュアンスを感じたが、確かに、県民の立場からは主体性を取り戻すために必要な視点なのかもしれないと思った。

「原発災害」ではなく、「原子力災害」の伝承館となっているところがミソという指摘には、漠然と不思議に思っていたが、深く考えたことがなかったことを認識した。しかし、その意味はまだ十分に明らかにできていない。その他、汚染水処理問題や除染土壌の再利用、除染なし解除など厳しい批判がクリアに掲載されていた。同時に、「故郷で 12 年ぶりに田植え再開します」「野馬土は今年も農家の無用な被ばくを防ぐ土壌測定やってます」（2022 年 3 月号）など故郷再生を目指す取り組みが紹介されていた。

2021 年 9 月号には浪江小学校校舎解体後に残る子どもの像（三原由紀子氏撮影）の写真があり、強く心に残った。機会があれば一度訪れてみたい。



三原由起子氏(浪江出身)撮影

そして家の解体がど
 んどん進んでいます。
 国の費用で解体して
 もらえる申し込み期
 限が3軒だけで、後
 は解体後の更地と3
 軒の空家となり寂し
 い限りです。



10時半にガイドの渡辺さんと落ち合い、私たちの車に乗ってもらってツアーを開始した。「避難指示区域の再編状況と概念図」という地図を見ながら走った。わかりやすい地図だが、相馬から広野に向けて南に走る地図になっていていつもと逆さまなので、方向音痴の私の頭はやや混乱した。

個人的なお話を聞きながら被災地を回れたことは、またこれまでとは違った視点から考えることができてありがたかった。渡辺さんは飯舘村長泥区出身、妻は川内村出身で、最初、川内村に避難した。しかし、すぐに仕事が再開したので戻り、最終的に相馬に暮らしている。詳しく語らなかったし聞くこともできなかったが、妻はすでに亡き人なのか、「お母ちゃんは」と頻繁に話題に出ていたが、「お母ちゃんは違うところに行っちゃって、軽自動車は残してある」とおっしゃっていた。住民票は今も飯舘村に残しているそうだ。



<http://www4.pref.fukushima.jp/investment/special/single04.html>

まずは沿岸部に沿って車を走らせ、いわゆるイノベーション・コースト構想の新たな風景を見て回った。イノベーション・コースト構想とは、2017年に結成された機構によってプロジェクト化された構想である。浜通りにおける産業復興のために、あらたな産業を創出するのだと、廃炉、ロボット・ドローン、医療関連、エネルギー・環境・リサイクル、農林水産業、航空宇宙という6つの重点分野からなり、巨額な

予算がすぎ込まれている。東日本大震災・原子力災害伝承館もこの一環だった。



個人的には、被災住民それぞれへの補償も十分でないのに、莫大な予算を載せて復興を主張するこの構想を苦々しく思ってきたが、渡辺さんには「批判的なんですね」と言われてしまった。「もちろん批判的です。そうじゃない人いるんですか？」と聞くと、ツアー客にはいろいろな人がいるようで、イノベーション・コーストにできた研究所や会社に興味を持って、憧れる人たちもいるそうである。

その後、リプルンや伝承館に案内してくれた。きのう行ったばかりだったが、言い出しずらく、再度見学した。リプルンで除染土を「再生資材」と呼んでいることに渡辺さんは憤慨しておられた。

また、十分な時間がなかったが、2021年10月に記念館としてオープンした震災遺構請戸小学校も見学した。ざっと見た限り、原発災害の展示はなく、津波被害が中心になっているように感じられた。またじっくり見学に来たい。

福島県が広いこともあるが、あっという間に7時間ほど経ってしまった。次回は自分の故郷である飯舘村へも案内したいと言ってくださった。また機会があればと思う。

6月26日(日)

宝鏡寺

午前は宝鏡寺の伝言館に立ち寄る。半年前には建築途中だった未来館が立派に出来上がっていた。伝言館の入り口には「死を想え」、未来館の入り口には「希望の未来へ」と刻まれていた。



双葉駅周辺

お昼は双葉駅周辺を見て回る。駅前にはピカピカの役場ができており、駅の裏には長屋コミュニティを作っている途中だった。移住者も募集しているという。あと1ヶ月かそこらで避難解除になるらしい。明るい希望を描き出そうとする意図と現実が妙にシュールな光景を映し出していた。







ちょっと行くと、周囲はまだ除染土の丘がいっぱいである。

富岡 311 語る会のガイドツアー

午後は、富岡 311 語る会のガイドツアーに参加した。この回は、富岡町の町民たちが東日本大震災で経験したことを「語り人(かたりべ)」として語り続けていこうと立ち上がったもので、2013 年から活動を始め、2015 年に会として独立、2016 年に NPO 法人化した。2017 年に避難解除された地点を中心に案内しながら、町民としての体験を語ってくれる。

事務所は「さくらモールとみおか」内にあって、そこでガイドと合流した。こちらの自家用車にガイドが乗り込み、方向を指示してもらって移動する。



ガイドは当時小学 6 年生だったという若い男性である。自分や家族のことも交えていろいろと話をしてくれた。

ここは商店街だったが、取り壊されて何もなくなった。ここは富岡高校。双葉郡には 5 つ県立高校があり、震災で休校になった。廃校にはなっていない。もともと女子高だったが、共学になり、国際スポーツ科というのができて、日本全国から優秀な生徒を募ってスポーツに強い学校になった。高校にゴルフの打ちっぱなしやジムもある。バト

ミントン、ゴルフ、サッカーが強い。すべて人工芝生で、天候に関わらず練習できる。人工芝生の県立高校はここだけだろう。芝生はそのままだから、放射線量は高いと思う。

今はその意志を広野の町にある双葉未来学園で受け継いでいる。全校生徒 700 人。双葉郡にはひとつだけで、遠くからも通ってくる。当初はさほどでもなかったが、今は偏差値が高くなってきている。双葉郡の子どもは優先される。いわきには高校がたくさんあるが、未来学園に憧れて、いわきから来る生徒たちもいる。校舎が大学のキャンパスのような作りになっていて、奥にカフェがある。



当時、自分は小学 6 年生で、震災が起きた時、体育の時間だった。グラグラ揺れて立っていられないほどだった。記憶は曖昧だが、11 日の夜、学校の体育館に避難して、家に DVD とか取りに帰った。雪が降ってきて大変だった。12 日には、警察官だけが防護服を着てマスクしていた。身内に原発労働者がいたら状況が何とかかわかっていたが、そうでないとまったくわからない。避難

と言っても数日かなと思っていた。

大人からは何も説明はなかったし、自分が避難民ということはわかっていたが、深くわかっていなかったと思う。3月11日の時点でみんな散らばったが、避難所では数人の友達と一緒にいたから、学校もなくゲームばかりしていた。みんなで集まってカードゲームをし、自由気ままな感じで遊び歩いていた。

避難所の記憶は断片的。友達と学校に行き、食べ歩いて避難所に帰るという生活で、ビッグパレットも5ヶ月間だけで、そこからみんなと別れて県内のアパートに入った。仮設住宅は抽選で当たった人だけだったし、親があんな薄い壁のところには住めないと3回くらい引越した。

バリケードが張られて、2012年になって物を取りに一時帰宅できるようになったが、15歳以上だったので、自分が入れるようになったのは2015年だった。

中学生になっても、義務教育だから勉強しなくても卒業できるとまったく勉強せず、美術と体育をのぞいてオール2。高校に入る時、どこも行くところがなく、私立でお金を払えば入れる高専に行って絵の勉強をした。美術だけは5だった。卒業した後、同じ高専の声優科に進学して、演劇の授業の講師で来ていた人が今の職場の代表（青木淑子さん）だった。富岡高校の元校長。声優はいろいろ闇の部分があることを知ってあきらめ、ちょうど就活をしていた時に、親が富岡に戻るといっているので、縁あってここに就職することにした。

父は富岡生まれで、母は川内生まれ、妹がいて、当時は1歳だったから何も覚えていない。学校では、町探検をしたり、資料館に

行ったりして一応習うが、それきり。今の小中学校の先生は富岡出身ではなく、若い先生が多く、だいたい3年以内で転勤していく。ちゃんと学ぼうとしない先生も少なくないので、図書館とかに行って自分で勉強しないとわからないことが多いと思う。

校舎が見えるが、これが今の小中一貫校。もともと1小、2小、1中、2中だったのが、三春町に富岡の学校ができて、すべての学校を閉校にしようとしたところになった。妹は郡山からバスで三春まで通っていたが、2019年にこの学校に帰って来た。もともとは富岡に1500人生徒がいた。

放課後に表現塾というのを学校でやっていたが、学童保育ができたことで教育委員会が打ち切った。普通の小学校とはちょっと違う。震災前はあったが、今は学校にPTAもない。地域との交流ができず、なかなか難しい。NPOでかたりべ育成講座をやっているが、富岡の小学生は誰も来ない。かたりべユーチューバーという講座をしたら一人だけ来た。夏休みも小中高生向けにやろうと双葉郡のすべての教育委員会を回ったが、今のところ1人だけ。震災前は地域との交流は結構あった。こんなふうに先生が入れ替わりで頻繁に転勤するということはほぼなかった。今は1年とか、3年とかで、ようやく慣れたのに、移動でリセットされる。

この道は震災前とほとんど風景変わっていない。国道6号線で、こちらに行くと相馬市、逆に行くといわき市。ここは役場、文化センターなどあった。ここから先は夜ノ森。町の半分以上は農業で、田んぼや牛。1年前か2年前まで更地になっていたが、今はだいぶ戻って、農業をやり始めている。富岡町で作って、「天の米」と売り出している。



空き地が目立ってくるが、建物を壊して6300世帯あったものが半分くらい解体された。夜ノ森地区は1月26日に帰還地区が緩和されて、11年ぶりに入れるようになった。その前は、虎ロープが張られ、右は入れるけれど、左は入れない。開通するところも見に行った。震災後、初めて足を踏み入れたら、懐かしいものだらけ。自分は夜ノ森で育ったので、自転車で走り回っていた。ここにも建物あったけど、解体された。セブンイレブン、レンタルビデオ、カラオケ、ヨークベニマルがあった。ベニマルも友達とカードゲームよくやっていた。なくなると、何があったのかわからなくなる。

昔の友達で富岡に住んでる人はゼロ。後輩や先輩とかはいる。郡山市にいた友達の方はそのまま郡山市にいる。11年前にバラバラになって、4年前に富岡で成人式があ

って、9年ぶりに会った。見た目が変わり過ぎて、誰が誰だかわからない感じだった。

夜ノ森駅をちょっと歩いてみましょう。無人駅。もともとここに駅舎があって、できるだけ震災前と同じように作ろうとした。桜祭りをやった時は人が来た。夜ノ森に住んでる人はほとんどいないので使う人もいない。桜が4月に咲き、5月につつじが咲いていた。花をとれるように車掌さんがここだけ徐行してくれていた。そのつつじも、震災でほとんど伐採され、今、少しずつ植えかけている。ここにあるいちょうの木は、駅が出来た時の記念に植えられたもので、駅も百年。「百年迎えました」という看板が以前はあったが、撤去された。

富岡の桜はほとんどソメイヨシノ。あれはエドヒガンザクラで、一番最初に咲いて、散り始めるころにソメイヨシノが咲く。





ずっとバリケードが張られていたが、今年の1月26日に撤去された。120円の時の自販機。双葉銀行。中に入れるが、全部ガラスが割られている。

今は、生活県内では放射線高くはない。町に一時帰宅で2015年に戻った時は、人が住んでいなくて、ほとんど静かだったが、戻ってきて、この町が好きだなと思い、語り部をやっているのを見て決意が固まっていった。今、語り部は20人くらいいる。ただほぼ高齢者で20代は3人だけ。

監視カメラがあって、夜はパトロール隊が回る。友達と自販機照らしていたら、警察官が来て、職務質問された。「懐かしくて」「悪い人いるんですか」と尋ねたら、「あんまりないんだよね」と言っていた、

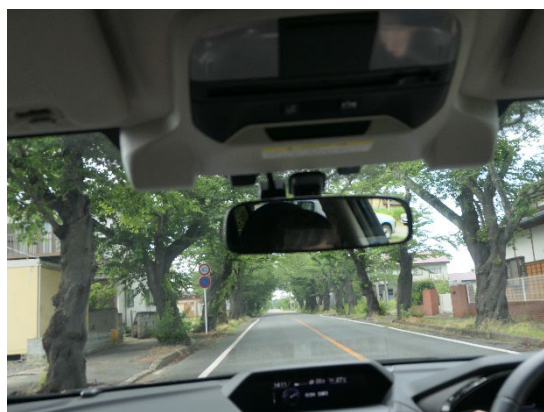
たんぼを借りて太陽光パネルが置かれている。84.5メガワット、7000世帯を賄える電力。

ここは母校があったところ。今は介護施設とジムやカフェになった。サッカーをやっていた。ここで震災にあった。校舎にカビがはえていた。2019年11月の時の写真で、この後に壊されてここがオープンした。学校はなくなっちゃった。



ここが桜並木。2,2 キロで 200 本の桜。大正時代に個人が植えたのが始まり。今年は桜祭りに 2 万人集まったが、イベント目的だからその時だけ。芸能人も来た。6 年間手入れできず、木が病気になってねじれてしまった。菌に感染して、切って今は手入れしている。年月が必要。

桜並木が通学路だった。30 分くらいのところに家があった。小学校の鼓笛隊パレードで通った。



小学校時代に住んでいた家。別の人が借りて住んでいたが、大家さんと連絡取れずそのままになっている。この後、子ども時代の家族の物語を語ってくれた。

当時子どもだったガイドの語り部の話を聞きながら現地を案内して頂いたことで、当時の状況をイメージする助けとなり、これまでにない貴重な体験だった。ここに感謝したい。

それにしても、黒いフレコンバックが中間貯蔵庫に埋められ、すっかり見えなくなった。イノベーション・コーストにボツボツと建つピカピカの建物に、まるで記憶が塗り替えられていくかのような錯覚を覚える。

つづく